

# 登別温泉の形成過程と集落構造

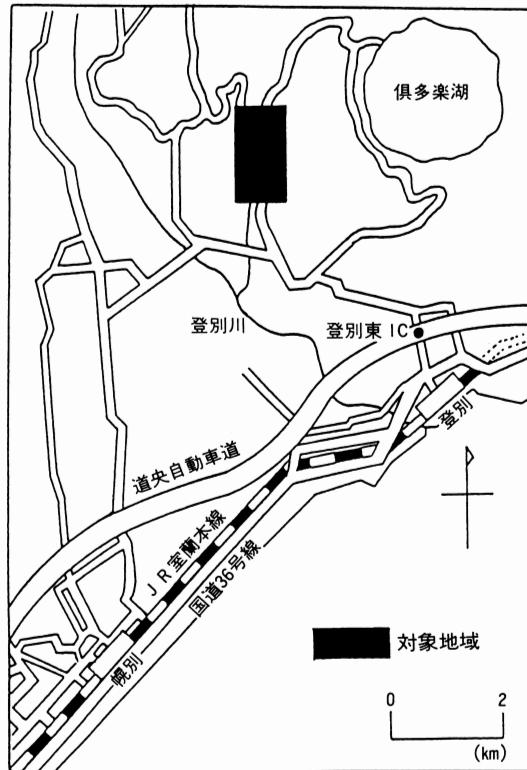
割 石 敏 昭\*・酒 井 多加志\*\*

## 1. はじめに

わが国の温泉集落は、療養・保養を目的として形成されたものが多いが、近年の国民のレクリエーション活動の多様化にともない、観光重視型の温泉地を指向する例が多くみられるようになった。次の二つの研究は、このような近年の温泉集落の変容を地理学の立場から分析した点で注目される。すなわち、山村順次(1978)<sup>1)</sup>は草津温泉を事例に、観光化にともなう温泉集落の再編成過程を明らかにし、地域住民の生活とバランスのとれた集落計画の必要性を述べている。また、井田仁康・上野健一(1985)<sup>2)</sup>は、浅間温泉の形成過程と集落構造についての分析を行い、住民の増加と利用目的の変化が、同温泉の景観ならびに内部構造に変化を及ぼしていると指摘している<sup>3)</sup>。

以上の事例が明らかにしたような変化が、他の温泉地ではどのような形でみられるのか、全国的にも知名度の高い登別温泉<sup>4)</sup>を取り上げて、宿泊施設の変化と土地利用現状を中心に考察したい。

この研究を進めるには、温泉地内のホテルと旅館の施設に関するデータ並びに土地利用図が必要となる。前者に関しては、登別温泉の全ホテルと旅館を対象にアンケート調査を実施した<sup>5)</sup>。アンケート配布数は18で、そのうち17の回答が得られた。回答が得られないものについては、登別温泉観光協会での聞き取り調査によって補足した。後者に関しては、土地利用調査を実施した。なお、研究対象地域に選定した登別温泉は、登別市の北東部、登別川の支流であるクシリサンベツ川の谷間に位置する(第1図)。



第1図 研究対象地域

## 2. 登別温泉の形成過程<sup>6)</sup>

登別温泉はアイヌによる湯治利用に始まるが、温泉地としての開発は1873(明治6)年に幌別場所請負人の岡田半兵衛が私費で登別温泉を開削したことから始まる。当時、温泉への交通の便が悪かったため、1881(明治14)年に登別～登別温泉間の道路の開発が行われ、10年後の1891年には客馬車が開通した。1915(大正4)年に、馬車鉄道の営業が開始されたが、その後、軽便鉄道(1918年)、電車(1925年)へと引き継がれた<sup>7)</sup>。この間、同温泉は日露戦争時に軍の傷病兵の保養地に指定され

\* 北海道教育大学釧路校 平成5年度卒業生

\*\* 北海道教育大学釧路校

ている。さらに1936（昭和11）年に、北海道帝国大学医学部附属登別分院が、つづいて1943（昭和18）年に傷痍軍人登別温泉療養所が設立されたことは温泉の発展に寄与するところが大きかった<sup>8)</sup>。このように、戦前の登別温泉は、登別～登別温泉間の交通機関の整備と、国による温泉湯治療養を目的とした病院設立を中心とした開発が行われた。

第2次大戦後、観光道路としての俱多楽湖自動車道が開通し（1951年）、さらにカルルス温泉（1952年）、オロフレ峠（1954年）とを結ぶバスが運行されるようになった。1957年には札幌とを結ぶ国道36号線ならびに登別～登別温泉間の道路の舗装が完成し、これにあわせるように、熊牧場（1958年）と町営登別国際観光会館（1961年）が開館した。さらに登別ゴルフ場（1962年）とカルルススキー場（1963年）が相次いで開設され、国民のレクリエーション活動にあわせた観光開発が行われるようになった。近年は、道央自動車動白老I.C.～登別東I.C.間が開通し（1985年）、道内の他都市とのアクセスが容易になった。それにともない、1989年にはマリンパークニクスが、1992年には民営の登別伊達時代村と天華園が相次いで開館した。このように戦後の登別温泉の発展は、自動車交通を中心とした交通の整備と、観光主導型の開発の2つの柱によって進められてきたことがわかる。

### 3. 登別温泉の宿泊施設の推移

登別温泉の観光重視指向の指標として、宿泊施設を取り上げ、その推移をみる。

1965年の登別温泉の宿泊施設は、ホテル・旅館が21軒、寮・保養所が4軒、Y・H（ユースホステル）が3軒であった（第1表）。それが1992年度には、ホテル・旅館が18軒、寮・保養所が2軒、民宿が3軒、Y・Hが3軒となっている。ホテル・旅館の件数は減少しているものの、部屋数と収容能力は1971年度から微増微減を繰り返しつつも着実に増加している<sup>9)</sup>。すなわち、この間、中小規模の宿泊施設の廃業ならびに既存の宿泊施設の規模拡大が進行したと考えられる。そこで、次に宿泊施設の開業・廃業ならびに規模拡大に関して検討する。

1993年度現在開業している宿泊施設18軒のうち、

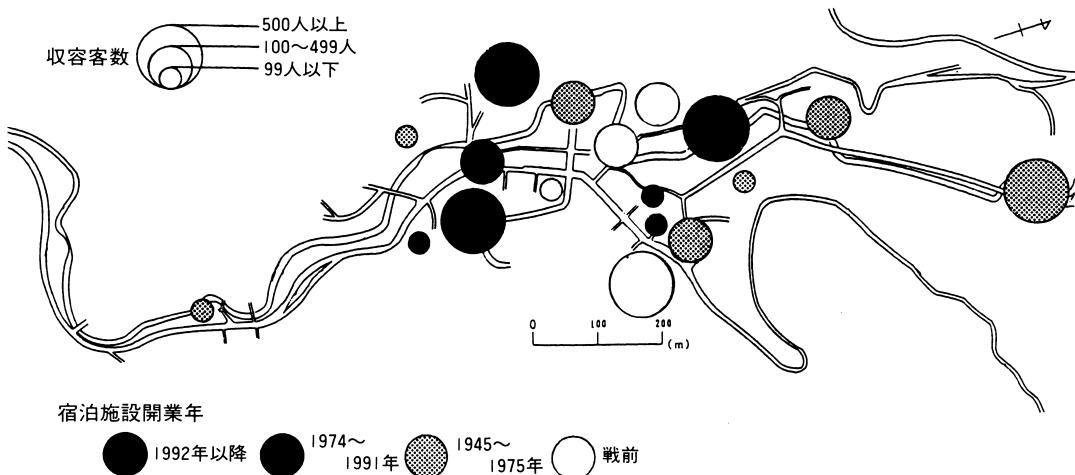
第1表 登別温泉における宿泊施設数の推移  
(1965、1970～1992年度)

年度	総数	ホテル・旅館	寮・保養所	民宿	Y・H	部屋数	収容能力
1965	28	21	4	/	3	/	/
1970	30	22	5	/	3	/	/
1971	30	22	5	/	3	1325	4896
1972	28	20	5	/	3	1289	4833
1973	26	18	5	/	3	1224	4667
1974	26	18	5	/	3	1481	5086
1975	28	20	5	1	3	1490	5191
1976	29	19	5	2	3	1697	5718
1977	30	20	5	2	3	1654	5128
1978	30	20	5	2	3	1809	6116
1979	28	18	5	2	3	1769	5950
1980	28	18	5	2	3	1765	5812
1981	28	18	5	2	3	1869	6717
1982	28	18	5	2	3	1942	6364
1983	28	18	5	2	3	1948	6479
1984	28	18	5	2	3	1928	6581
1985	28	17	5	3	3	1892	6300
1986	28	18	4	3	3	1884	6285
1987	26	17	3	3	3	1849	6189
1988	26	17	3	3	3	1848	6261
1989	26	17	3	3	3	1875	6338
1990	26	18	2	3	3	1767	5973
1991	26	18	2	3	3	1767	5973
1992	26	18	2	3	3	2221	7254

（/は不明）（登別温泉観光協会資料より作成）

第2次大戦前に開業したものは4軒である（第2図）。1938年に宿泊施設が11軒あったことから、戦後、その多くが廃業していることがわかる。すなわち、戦前の湯治療養を目的とした小規模な宿泊施設の多くは、戦後の急速な観光地化への対応ができず、存続が困難であったと考えられる。戦後、宿泊施設は1945年～1973年に7軒が、1974年～1991年に5軒が、1992年以降に2軒が開業している。これらは、湯治療養の客よりも観光客を相手にしたものであり、付帯施設として宴会場、飲食店、バー・スナック、ゲームコーナー等を備えている。

宿泊施設の収容客数は1992年現在、99人以下が7軒、100人～499人が6軒、500人以上が5軒となっており、大規模な宿泊施設が多い。保養所、民宿、Y.H. を含む宿泊施設1軒あたりの平均収



第2図 登別温泉における宿泊施設の開業年別、規模別分布（1993年）

宿客数は279人で、20年前の172.6人と比較すると100人以上の増加がみられる。この要因として、大規模な宿泊施設の開業とともに、宿泊施設の増改築による規模拡大が考えられる。アンケート調査によると、この5年間で宿泊施設15軒<sup>10)</sup>のうち9軒が増改築を行っており、収容能力の増大ならびに付帯施設の整備がみられた。

#### 4. 登別温泉の集落構造

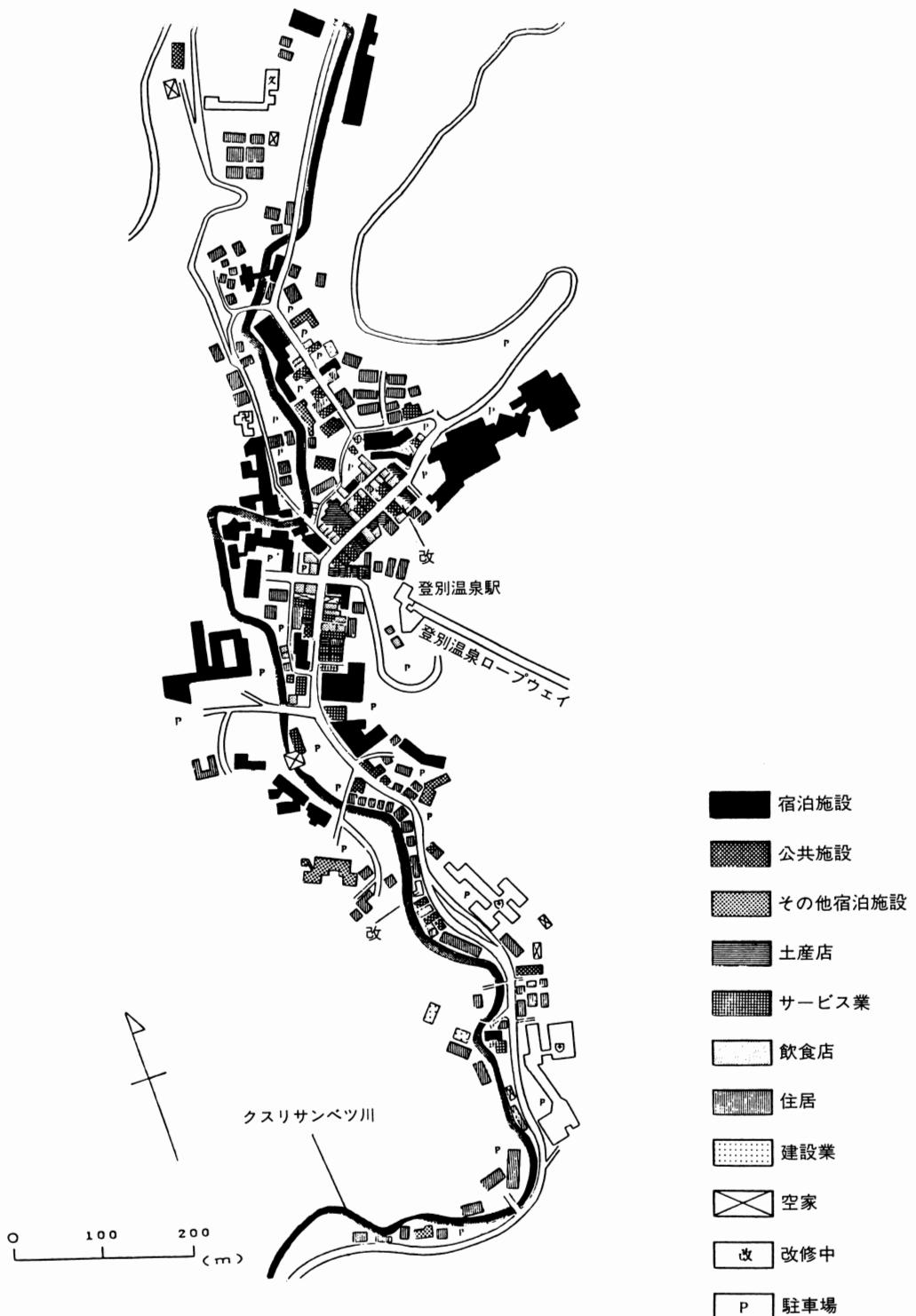
登別温泉は上記の経過によって、日本を代表する観光型の温泉地となつたが、以下では、このような観光型の温泉地がいかなる集落構造を有しているのか、土地利用を中心に検討していきたい（第3図）。

登別温泉の集落はクスリサンベツ川に沿って細長く伸びるが、周囲を山に囲まれているため、土地は狭く、建物は密集した状態にあり、宿泊施設の高層化が進んでいる。

温泉地の中心部は登別温泉ロープウェイ登別温泉駅の西付近に位置する。ここには、観光会館、市役所支所、金融機関、バスターミナルなどの主要施設が集まるとともに、商業地区が形成されている。商業地区は温泉街を南北に貫く主要道路沿いにはみやげ物店が、そして裏通りには飲食店、とくにバー・スナックが集中しており、歓楽街的色彩が強い。

宿泊施設は商業地区を取り囲むように分布しているが、位置的には、川沿いあるいは山麓に立地しているものが多く、主要道路沿いに立地しているものは少ない。川沿いあるいは山麓に立地している宿泊施設は建物の高層化が進んでおり、収容客数が多い。宿泊施設の立地場所を開業年でみると（前掲第2図）、戦前に開業した宿泊施設は商業地区に隣接して立地しているが、戦後に開業した宿泊施設は、1945年～1973年に開業したもののが分散的であるものの、おおむね、戦前に立地した宿泊施設の周囲に立地する傾向にある。このように、宿泊施設は商業地区に隣接した地域から順次建設されており、集積域の拡大がみられる。このことは、一般に近年の大規模宿泊施設、とくにリゾート型ホテルは既存の商業地区から分離する傾向があるが、登別温泉では、宿泊施設と商業地区は相互依存関係にあることを意味していると思われる。

宿泊施設に接して、専用の駐車場が設置されている。駐車場は近年のモータリゼーションに対応するため、宿泊施設の付帯施設としてあらたに設置される必要性が生じたが、温泉街はもともと建物が密集した状態にあり、山麓の大規模な宿泊施設を除くと、一般に駐車場の確保が困難であった。そのため、廃業した店舗・宿泊施設の跡地が駐車場に転用され、現在では温泉街の主要な土地利用の一つになっている。



第3図 登別温泉地区集落の土地利用 (1993年8月)  
(現地調査より作成)

宿泊施設の周辺には住宅が立地しているが、その多くは宿泊施設で働く従業員の寮やアパートである。住宅は病院の周囲にも見られるが、これらは病院の職員住宅になっている。このように、登別温泉での住宅の立地は、宿泊施設や病院の立地の影響を受けている。

この他、病院は温泉街の南端に、学校は北端に立地しており、観光とは直接関連のない大規模施設は、中心から離れた場所に立地している。

## 5. おわりに

本稿は登別温泉の形成過程と集落構造について検討してきた。その結果を要約すると以下のようになる。

(1) 登別温泉は、明治初期に療養・保養型温泉地と開発されたが、第2次大戦後は国民のレクリエーション活動の多様化にあわせて、観光型温泉地へと変化した。このことは、テーマパークの開園、大規模な宿泊施設の開業、既存の宿泊施設の廃業や増改築による規模の拡大、宴会場やバー・スナックなどの付帯施設の整備にあらわれている。また、戦前戦後を通じて、温泉の開発は交通の整備によるところが大きい。

(2) 温泉街の中心部には主要施設が集まるとともに歓楽街的色彩の強い商業地区が形成されている。宿泊施設はこの中心部に隣接した地域から順次建設されており、集積域の拡大がみられる。宿泊施設に隣接して駐車場が設置されており、現在では温泉街の主要な土地利用の一つになっている。宿泊施設や温泉の周囲にはそれらの施設の影響を受けて従業員の寮やアパートが立地している。また観光とは直接関連のない施設は、中心から離れた場所に立地する傾向がみられる。

以上の考察をふまえて、今後は、登別温泉集落の過去の土地利用図を作成し、集落構造の変化を解明していきたいと考えている。

## 謝 辞

本稿を作成するに当たり、登別市役所経済・観光課および登別温泉観光協会の方々には、とくにお世話になりました。また、アンケート調査の際には、登別温泉の旅館・ホテルのご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

## 注

- 1) 山村順次(1978)：草津温泉集落の再編過程。千葉大学教育学部研究紀要, 27-1, 191~215.
- 2) 井田仁康・上野健一(1985)：浅間温泉の形成過程と集落構造。筑波大学地球科学系人文地理学研究グループ地域調査報告, 7, 91~99.
- 3) この他、温泉地の変容に関しては、以下の論文において検討されている。  
山村順次(1969)：伊香保・鬼怒川における温泉観光集落の発達と経済的機能。地理学評論, 42-5, 295~313.  
山村順次(1969)：伊香保・鬼怒川における温泉観光集落形成の意義。地理学評論, 42-8, 489~505.  
山村順次(1970)：熱海における温泉観光都市の形成と機能。大東文化大東洋研究, 22, 38~72.  
白坂蕃(1974)：伊豆半島における温泉観光集落の発達。東京学芸大紀要第部門社会科学, 26, 80~115.  
浦達雄(1986)：山梨県下部温泉の変容。新地理, 33-4, 39~50.
- 4) 登別市は、1961年に全国的に有名な登別温泉のイメージを前面に押し出すために、幌別町から登別町に町名を変更し、1970年の市政施行で現在に至る。
- 5) 本研究での宿泊施設は、ホテルと旅館を対象とし、寮・保養所、民宿、Y・Hは含んでいない。
- 6) 本章は以下の文献によった。  
登別町史編纂委員会(1967)：『登別町史』登別町役場, 240~248, 849~863, 881~890.  
登別市史編纂委員会(1985)：『市史ふるさと登別』登別市役所, 153~171.
- 7) 昭和初期には電車からバスへと輸送手段が切り替わったが、これは電車の電力消費が発電所の出力の限界に近かったことによる。
- 8) 1945年に国立登別病院になり、現在に至る。
- 9) とくに1991年から1992年にかけての増加が著しいが、これは、近年のテーマパーク開設による観光客の増加に備えたものと考えられる。
- 10) 1988年以降に開業した3軒を除く。

## 参考文献

- 浅香幸雄・山村順次(1974)：『観光地理学』大明堂, 56~60.  
登別市市役所(1993)：『経済要覧(平成四年度版)』, 27~39.  
登別市史編纂委員会(1986)：『登別の歴史』登別市役所, 401~416.  
山村順次(1976)：『観光地域論～地域形成と環境保全～』古今書院, 209~232.